

## 表紙のことば

### 野村寿孝

金泰生さん、金石範さん、二人には埼玉文学学校で出会った。一九八三年四月、私は浦和の街の電柱に貼られたポスターを見てこの学校の受講生になった。八五年十月、自主講座として再出発してからも泰生さんは専任講師としてとどまられた。そして、八六年十二月、逝去された。

創作合評で泰生さんは「自分にとつて切実な思いを書きなさい。きみにはきみの歌しか歌えない」とおっしゃられていた。

合評後も居酒屋で、感情むきだしの受講生らの談義にもつきあつてくれた。

「骨片」「私の日本地図」など、濟州島生まれの泰

生さんの作品には、日本人にはない重さと深さがあった。問題意識の質が違った。

私はそのころまで、在日朝鮮人が身近なところで暮らしていることを知らなかった。日本人には、日本だけが平和で豊かであればいいという内輪の意識が内部にあり、為政者に都合のいい政治を許し、メディアもそれにならう。人間にとつて大切な問題を無視し、タブー視し、異質なものを排斥する文化と歴史が作られてきた。私は日本を客観視する視座を得たような気がする。

金石範さんも文学学校に好意的に関わつて下さっている。

濟州島四・三事件を題材にした「鴉の死」、そして大長編「火山島」。現実の重さ、深さと同質の仮構の巨大な時空間をことばで構築する。それを実現したのが「火山島」だと思う。圧倒された。

私も齢六二、泰生さんが亡くなられた齢を越えた。思いのこすこと、やりのこすことがないように悪あがきをしていくつもりです。